

論文の内容の要旨

氏名:小 林 克

博士の専攻分野の名称:博士(史学)

論文題名:近世物質文化の考古学的研究

1. 目的

本論の目的は、近世の遺跡から出土した様々な遺物をもとに、その生産・流通・用途、歴史等を明らかにしていく事である。ここでは出土遺物の考古学的分析を出発点とするが、それを文献史学だけではなく、その他の学問分野や史資料も用いて分析することで、物の用途を明らかにし、そしてその物の歴史を明らかにするとともに物からの歴史復元を試みる方法—物質文化研究—により近世社会を復元することである。

2. 本論の構成

本論はIV部で構成される。第I部では、近世考古学と物質文化研究という研究テーマについて対象と研究方法について述べる。第II部は、上記方法論に基づいた物質文化研究を遺跡出土の遺物について、個別研究として展開する。第III部では、近世遺跡からの出土遺物を対象に比較分析を行い、海外との物質文化の交流や相互に影響を与えあっていたことを明らかにする。第IV部では本論のまとめとして成果と課題について要約し、今後の研究の展望を示す。

3. 対象と方法

本論では日本の近世の遺跡から出土する複数の遺物を対象に、その物質文化から推定できる近世社会の復元を目指すものである。そのため、近世の遺跡から出土する資料等から、その資料の歴史的意味や用途を考察することはもちろんとして、同時期の海外の遺跡から出土した資料も分析の対象となる。具体的に研究対象とするのは、江戸遺跡の資料と、それらの資料を比較検討するための国内の別地域、さらには海外の同時期の資料が該当する。本書では最初に近世考古学の中でその存在理由や用途や歴史など不明点の多い資料を取り上げる。それは第II部各論で論ずる「ボウズ」・「照明具」・「火打石」・「今戸焼」・「瓦漏」である。第III部では日本国内で出土しているオランダ製品やオランダなど海外の同時期の遺跡から出土している「クレイパイプ等の喫煙具」、「茶の道具」、「瓦やレンガ等」を対象とした。

こうした資料の分析を進めていくが、ここでの分析方法は以下の通りである。まず、近世遺跡の資料の考古学的分析・資料批判を行う。次に文献史学や民具研究など異なった方法を持つ分野の史資料との比較研究や、聞き取り等民俗学的調査の内容から、その資料の関係性や歴史を検討していく。つまり出土した資料を対象としつつ、より広範な意味での物質文化研究を通して物から見える歴史の再現を目指す。

近世考古学が対象とする時代では、文献資料も多く存在し、その解釈に文献資料を用いたり、文献史学の成果を引用する事が必要になる。ただし、ここでは各学問分野による方法論の違いをきちんと峻別し、論を進める必要がある。考古学と歴史学に加えて本論では、民具研究の手法や資料、更に民俗学的調査事例も対象とし、より広範囲な近・現代の資料も援用する。こうしたいわば第3の分野の資料等を分析に用いる際にも、それぞれの学問分野の内容を峻別し、そこから導き出される内容は、仮説の提示であり、その仮説を様々な分野から検証していくという立脚点に立ち論を進める。

4. 意義

近世の物質文化の一部は海外との相互影響により成立、存在した可能性が、出土遺物から見えてきており、それらを具体的に提示し、比較することで、近世の物質文化が国や地域を越えて影響し合っていた事を明らかにできる。

物質文化研究で物の歴史を分析する中で、物自体は近世という時代から現代まで分析対象が延長されるし、空間的にも日本という国の領域を超えて展開する場合がある。

このように近世考古学の可能性は、考古学という範疇に留まらず、より広い意味での物質文化研究の中で拡大できるし、「物」資料の歴史を解明する方法を示すことで、考古学研究全体の可能性を大きく拡大していくことが出来ると考えている。本論は近世資料を対象に物質文化研究を行うことで、これまでの近世社会像に対して、新たな解釈が行えることを示したことに意義を持つ。

5. 具体的研究とその成果

第Ⅱ部 ボウズの分析では、用途不明の土器を、真綿のばし用の土器・ボウズであると事を明らかにした。その上で考古資料と民具資料との通時的変遷案を示した。課題としてはボウズは江戸遺跡以外の近世遺跡での出土が限定的であり、より多く資料を集成して分析を進めたい。照明具に関しては、出土資料だけではその理解に限界があり、民具資料に基づいて照明具全体の構成に基づいた分類を行い、その上で出土資料の位置づけを明確化し、照明具全体の中では部分的である出土資料の用途や役割を明らかにすることが出来た。火打石については、江戸遺跡から出土する火打石を追求し、現在の産出地の調査や聞き取り調査等の民俗学的調査、文献資料調査から、生産から流通、使用の流れの概要を明らかにした。今後は近世段階の他の産出地を調査し各地の生産・流通・販売・使用の実態を解明し近世から遡って、より古い時代の発火具について、火打石を中心に、明らかにしていくことで日本の発火具の歴史を明らかにすることが出来よう。

都市江戸・東京の製陶業である今戸焼については、その歴史的変遷や、瓦、日常生活道具、人形など土器以外にも多様な製品を作っていたことを明確化し、軟質陶器が製造されていた点が重要であると指摘した。瓦漏とは白砂糖製造に必要な道具である土器であるが、それが江戸遺跡の大名藩邸内から出土していることを指摘・証明し、さらに日本には江戸後期の一時期、瓦漏を使った白砂糖作りが西日本一帯に存在していた可能性を指摘した。

第Ⅲ部の成果としては、鎖国していたと言われてきた近世段階でも様々な物が海外からもたらされ、また日本の物がオランダ等にもたらされていたことが出土資料の調査から判明したことである。そして江戸文化や生活の道具、生活スタイルにまでオランダなどの海外文化の影響があることやその可能性を提示した。近世段階でタバコの喫煙具や、茶を飲む容器や道具など、様々な点で物質文化の交流と相互の影響が認められた。平戸や長崎にはオランダ産のレンガや台湾でオランダ東インド会社を作ったと考えられるレンガも、もたらされていたことが明らかになった。

6. 課題と展望

本論では、近世考古学研究の一つの方向性として、遺跡から出土した資料を多角的に分析することで、上記のような成果が得られた。そして新しい方法論を提示し、それを具体的に遺物の研究を進めることで、有用性を確認できた。

しかしながら本論で展開したような方法論を用いた研究はまだ始まったばかりである。不明だった物の用途を明らかにし、新たな近世社会像を描く事ができたが、研究の課題は多く存在している。

全体としては、出土資料から物質文化を追求してきたが、第Ⅱ部では、近世の出土資料を元に、それを物質文化研究の素材として近代・現代まで様々な分野の資料から多角的に分析を試みた。いわば時間軸を近世という時代から解き放ち、物からの歴史を現代までたどりつつ、追究したと言えよう。第Ⅲ部は近世遺跡出土資料の物質文化研究を進めると、そこには空間として日本という領域を越えた交流や相互の影響が存在することを、資料等の比較検討から示すことが出来た。今まで江戸というと、日本の伝統文化が花開いた時代というイメージが強かったが、考古資料の個別研究を積み重ねる事で、江戸時代初期から江戸の生活や文化には海外からの影響が存在したことを、示すことが出来た。つまり考古資料から物質文化を探究することで、「鎖国」というイメージとは違った、江戸時代のイメージを具体的に構築し得ると考える次第である。

本論では、江戸遺跡出土資料からその分析を開始し、物を主体とした物質文化研究という枠組みで展開したが、そこでは時空を超えて分析が広がり、新たな歴史的解釈が生まれてくる可能性を示すことが出来た。

今後も、既成の学問領域を横断する方法論の検討と、具体的事例の分析を交互に進め、本論で述べた様な資料やそれ以外の資料についても物質文化研究を推し進めていくことが、これからの近世社会の復元にとって有益な方法であると確信する。